



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第 22 主日 B 年 (2024 年 9 月 1 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：申命記 4 章 1—2、6—8 節

第二朗読：ヤコブの手紙 1 章 71—18、21b—22、27 節

福音朗読：マルコによる福音書 7 章 1—8、14—15、21—23 節

分離と交わり

先週まで、5 週間にわたって『ヨハネによる福音書』6 章が読まれました。今週からは、本来の典礼暦年 B 年に読まれる『マルコによる福音書』に戻ります。五千人に食べ物を与えた (6 章 30—44 節) イエスさまは、湖の上を漕ぎ悩んでいたお弟子さんたちに湖の上を歩いて近づき (45—52 節)、そしてゲネサレトという町で多くの病人をいやします (53—56 節)。

今日の福音朗読は、ゲネサレトでの出来事だと思います。

ファリサイ派の人々と律法学者がエルサレムからやって来ます (7 章 1 節)。福音書に登場するファリサイ派はイエスさまと敵対するグループのように描かれています。しかし、実際のところは、律法をしっかりと守ることに熱心だった人々でした。そして、どうやら主流派と非主流派がいたみたいです。主流派はエルサレムを中心に活動していました。律法の専門家である律法学者といっしょになって、律法を厳しく守りつつ、他人にも律法の遵守を求めました。つまり、自分に厳しく他人にも厳しい人々でした。

そんな、いわば宗教エリート^{ちが}のエルサレムのファリサイ派とは違って、イエスさまが活動したガリラヤのファリサイ派は貧しい農民や漁民たちだったと言われています。彼らは生活の不自由さに直面しながら、律法を正しく守ることに救いを求めたのです。無学な人々ですから、律法の字面と、それまでの言い伝えを守ることを大切し、神さまからの掟である律法の「こころ」に触れることはなかったのかもしれない。

イエスさまは、そんなガリラヤのファリサイ派に、律法の根本を説いています。今日の福音朗読でファリサイ派と律法学者の人々は、そんな真面目で実直な農民たちを指導するためにエルサレムからやって来たのかもしれない。

食事の時に念入りに手を洗うのは、衛生のためではなく、汚れを防ぐためでした。3節に「念入りに手を洗って」とあります。ギリシア語の原文を直訳すると「手をこぶしにして洗わずには食事をしないのである」です。手を広げてではなく、こぶしにして、その上に水をかけるのは儀式的な手の洗い方なのかもしれません。今日の福音朗読にあるように、ファリサイ派の人々は「汚れる」ことに対して敏感であり、自分たちが「清い」者であることを追求していました。汚れから離れることが、彼らにとって律法を守ることに他ならなかったのです。

ファリサイ派とは「分離した」という意味があると言われていています。律法と言いつた伝えを厳格に守ることは、普通の人々から「分離した」状態です。「あの堕落した人たちは違う」という意識が、ファリサイ派のアイデンティティだったのでしょ。

「汚れた」(2、5、15節)はギリシア語で「コイノス」(koinos)と言います。これには「共通の」という意味が元々あります。ファリサイ派の人々にとって「共通のもの」は、特別に清められたものではないので、「汚れた」ものになるのでしょう。実は「コイノス」から「コイノニア」(koinonia)という単語が生まれます。「コイノニア」は「交わり」を表す言葉です。あるいは「交わりの結果、生じる一致」を意味する言葉です。

人々から「分離した」というプライドをもつファリサイ派にとって、人々に「共通の」ものは「汚れて」いました。しかし、イエスさまは「分離」ではなく「交わり」と「一致」を生きます。人々と「交わりと一致」、そしてなによりも父なる神さまとの「交わりと一致」を生きるのです。そして、イエスさまはわたしたちにも「交わりと一致」を生きてほしいと願っているのです。そのためにイエスさまは十字架にかかり、そのためにイエスさまはご聖体になってくださいます。

「コイノニア」は、初代教会では「ミサ聖祭」を表す言葉へと深まっていきました。ミサは「交わり」と「一致」の時なのです。

残念なことに、わたしたちには「分離した」という傾きがあります。人との違いが、自分が生きているよすがとなります。「あの人たちは違う」という意識はプライドを生みだします。それがいきすぎると、つまり「分離した」が過ぎると、誰かを否定し、誰かを攻撃するようになります。そこには「交わり」は生まれません。むしろ生まれるのは差別です。現代社会は「分離した」意識で満ちています。その点、エルサレムからわざわざやって来た指導的なファリサイ派と律法学者たちと、わたしたちはあまり変わらないのかもしれません。